

美術科教育学会通信 49

2003年6月9日発行

事務 / 通信 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学 美術学科 美術科教育学研究室 柴田和豊宛

Tel. / Fax. 042 (329) 7608 Fax. / 042 (329) 7599 (柴田直通)

Tel. / Fax. 042 (329) 7594 (相田直通)

E-Mail. /kshibata@u-gakugei.ac.jp (柴田) /aidaman@u-gakugei.ac.jp (相田)

次期の事務局の担い手は？

美術科教育学会代表理事
柴田和豊 (東京学芸大学)

3月末に行われました横浜での大会から2ヶ月が過ぎました。早いものです。横浜大会は、多くの熱心な研究発表、魅力的な企画、関係者の方々の献身的なご努力に、横浜という地の利が加わって、ほんとうに盛会となりました。ありがとうございました。

きょうは、大会の総会でお話をし承認して頂きました一つの要件を軸に、会員の方々に私の思いを伝えさせて下さい。大会で承認頂きましたことの中に、役員改選のための選挙管理委員会を設けるということがあります。いつの間にか現執行部の任期もあと1年ほどを残すだけで、そろそろ次の体制の準備をしていかねばならなくなっているのです。

この時の流れに対して私が思うことは二つあります。一つは、過去2年間において私が十分に職責を果たしてきたのかということであり、もう一つは学会の次の運営体制はどのように組み立てていくのだろうかということなのです。前者に関しては、

私の功績に帰すべきものは見当たりませんが、担当者の方々の多大なご尽力によって、学会誌の査読と編集の体制が飛躍的に充実したこと、東西の研究部会が精力的に開催されるようになったことなどで、学会活動は質的な深まりをみせていると思っています。

ところで、後者についてですが、総会でも心配している旨をお話ししましたように、いささか案じております。現時点でも、かつてとは違って事務局を組織できない現実があるのですが、事態は改善されるのでしょうか。

年齢的にいいますと、50代の会員層でもう1～2期運営体制をつくるのが無理のないことのように思えます。しかし、代表理事や副代表理事は選べても、事務局を構成できないという事態が繰り返されないとはいえないようです。

このような状態を解消するには、学会が活性化し、求心力を増していかなければならないことはいうまでもありません。ですが今回は30代半ばから40代後半の大学勤めの会員の方をターゲットに不躰で挑発的な発言をさせて頂こうと思っています。お許し下さい。

「大学のポストを得た時や昇任の折に、業績欄に『美術教育学』所収のご自分の論文をお記しになったことはありませんか」、あるいは「社会での活動に関して、美術科教育学会会員とお記しになったことはありませんか」。なくはないはずです。

学会活動の本質は、私たちの知的研鑽にあることはいうまでもありません。しかし同時に会員相互の実利に應えるとい

うこともその機能として期待されるものでしょう。そして、もしそのような事柄に対応してくれるシステムがなくなればどうなるのでしょうか。これから職についていこうという若い人たちをどのようにサポートしていけばよいのでしょうか。

事は順繰りに動いているのです。だとしますと、これまで学会の実利的メリットを享受する立場にあった方たちが、その効用を若手会員のために維持する役が回ってきているのです。その点から一期でも学会運営を担って下さる新たな方たちの登場を待っています。

* * *

■新入会員の紹介■

小林 克敏 (半田市立成岩中学校)
伊藤 増代 (半田市立亀先小学校)
渡辺 貴之 (聖徳大学附属小学校)
角 雄二 (京都教育大学大学院)
鳥賀陽梨沙 (Teachers College, Columbia University)
飯田 史帆 (兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科)
伊 丽娜 (広島大学大学院)
長尾 寛子
長谷川 賢 (京都教育大学大学院)
横田 学 (京都市立芸術大学 助教授)
築山 美幸 (佐久市立近代美術館)

* * *

美術科教育学会 第25回横浜大会報告

宮坂元裕 (横浜国立大学)

平成15年3月26・27・28日の3日間は天候にも恵まれ、横浜大会を無事に終了する事ができました。これも、一重に皆様のご協力の賜物と感謝申し上げます。有り難うございました。

昨年2月、横浜でこの大会を引き受ける時3つのことを考えました。

1、横浜国大の教員養成課程の学部生が大会運営の主要部分をどの程度まで実践できるか挑戦してみたかったのです。特に博士課程の学生、赤木恭子さんの企画力に注目し、実践の場を与えたかったのです。修士課程の学生たちが、本当によく協力してくれました。

2、今後、鑑賞教育は、表現教育から独立できるほどの内容を持ち始めており、堀典子先生は科学研究費補助金対象の大型プロジェクトを鑑賞教育で立ち上げていました。本年3月は、その纏めの時期でありました。その資金と、大会費の一部とで、ヨーロッパ美術教育において、大きな影響力を発揮しつつある、ルドルフ・ツア・リップ先生を招聘することはプロジェクト及び大会の両者に意義のあることであり、その可能性がありました。

3、宮坂が6年ぶりに大学内の管理職から解放されました。(しかし、昨年10月又、管理職にさせられるとは、引き受けた時点では夢にも思いませんでした。)

発表者40名を想定して会場を1年前に予約しました。公募してみると、70名

の応募があり、タイム・テーブルを組むのが大変でした。4室に限定したので、ほぼ、どこも満員に近い盛況でした。小野康男先生は、大学院生を相手にリハーサルを繰り返し入念な準備をして講演会に臨んでいただきました。現代のフランス哲学から、日本の美術教育、特に鑑賞教育を眺めた、示唆に富んだお話が聞けました。



小野先生の講演

ルドルフ・ツア・リップペ先生の講演は、日本人の持っている優れた感覚に、もっと自信を持ちなさいと激励してくれているように私には聞き取れました。広い会場が、ほぼ満員であったことも嬉しいことの一つでした。最後に日には、昼休みにあたる時間帯にも係わらず堀先生を代表とする科学研究費対象の研究発表に、続いて行われた総会に、多数の会員が参加して下さいました。



ルドルフ・ツア・リップペ先生の講演
通訳は、鈴木桂子氏

大会参加者総数は318名でした。総収入1490000円総支出1489474円懇親会収入439000円懇親会支出436229円です。帳簿など公開しています。その資料を見れば一目瞭然ですが、自分でも信じられないような、黒字にも、赤字にもならない結果となりました。大会運営の内容はともかくとして、若い人に、企画や運営のノウハウを伝え、まがりなりにも大会を運営できる人が育ったことが、この大会の成果だと思っています。学部生が司会進行を行いました。これも、画期的なことだと思っています。賛否両論有ることは承知していますが。学部生にも運営ができる見本として、受け止めていただけたらと思っています。ご協力有り難うございました。



岡山大学による共同研究発表
(森氏、赤木氏、和田氏)

総会議事及び予算・決算報告

2002年度美術科教育学会総会
— 議事報告 —

日時：2003年3月28日（金）

場所：横浜国立大学教育文化ホール

(特) 報告事項

1. 学会誌編集委員会の報告
2. 学術関連会議の報告
3. 地域研究発表会の実施報告及び今後の予定
4. その他

(監) 審議事項

1. 2002年度決算（監査報告）
2. 2003年度予算案（会費納入にかかわる諸問題）
3. 選挙管理委員会の設置について
4. 学会賞の設置について
5. 次期大会の開催について
6. その他

■ 2002年度会計決算報告 ■

収入の部（単位＝円）

項目	収入額
年会費	3,967,300
正会員会費	02 = 3,488,000
01 =	270,000
00 =	86,000
賛助会員会費	02 = 80,000
01 =	0
00 =	0
購読機関会費	02 = 0
01 =	0
00 =	0
外国会員会費	37,100
前受会費	0
学会誌24号掲載料 （1件24,000+超過頁1頁5,000）	865,000
その他	
小計	4,832,300
前年度繰越金	2,116,426
合計	6,948,726

■ 2002年度会計決算報告 ■

支出の部（単位＝円）

項目	支出額
大会補助金	200,000
「美術教育学」24号印刷代	1,278,500
学会センター支出 （コピー代、ファクシミリ代、 学会通信費、会費口座振替通知 郵便料、会誌送送料、年会費自 動引き落とし口座登録料、学会 通信送送料、会員数統計表出力 費、大会案内他郵送料、会員業 務費、その他）	1,417,318
学会誌編集費	242,660
学会通信作成費	87,998
通信費	38,140
会議費	10,472
旅費（理事会、総務会）	81,000
事務補助費	412,902
事務費（消耗品）	46,100
部会補助費	130,000
東西地域研究発表会・ プレシンポジウム経費	144,224
学術協力財団賛助会費	50,000
学術会議関連経費	10,900
予備費 （名簿作成、著作権使用料等）	331,122
小計	4,481,336
次年度繰越金	2,467,390
合計	6,948,726

2003年3月26日 会計担当理事 宮坂元裕

監査報告書

美術科教育学会2002年度 会計決算報告書を帳簿と照らし合わせながら厳正に監査をしました。その結果、正確妥当であることを認めます。

2003年3月26日 監事 長谷川哲哉
増田金吾

■ 2003年度会計予算 ■

収入の部 (単位=円)

項目	収入額
前年度繰越金	2,467,390
年会費 (正会員会費 8,000 × 430名 賛助会員会費 20,000 × 4社 海外会員 8,000円 × 7名)	3,576,000
学会誌25号掲載料 (25,000 × 25名)	625,000
その他	25,000
合計	6,693,390

■ 2003年度会計予算 ■

支出の部 (単位=円)

項目	支出額
大会補助金	200,000
「美術教育学」25号印刷代	2,300,000
学会センター支出 (コピー代, ファクシミリ代, 学会通信費, 会費口座振替通知 郵便料, 会誌送送料, 年会費自 動引き落とし口座登録料, 学会 通信送送料, 会員数統計表出力 費, 大会案内他送送料, 会員業 務費, その他)	1,500,000
学会誌編集費	220,000
学会通信作成費	150,000
通信費	20,000
会議費	10,000
旅費(理事会, 総務会)	120,000
事務補助費	400,000
事務費(消耗品)	40,000
部会補助費	130,000
東西地域研究発表会・ プレシンポジウム経費	200,000
学術会議関連経費	110,000
予備費	500,000
小計	5,900,000
次年度繰越金	793,390
合計	6,693,390

2003年3月26日 会計担当理事 宮坂元裕

広島大会へのご案内

若元澄男（広島大学）

第26回美術科教育学会は安芸の国広島で開催いたします。我が広島大学を会場に3月20日（土）、21日（日）の2日間を予定しております。昨年度までの例をふまえ3月末開催を前提にしたため会場を確保できる日程が上記のようになりました。また、斯学の研究者だけでなく、実践の場で日々子ども達の前に立ち奮闘・努力されている先生方も広く学会に参加していただきたいとの声も考慮し連休中に開催することといたしました。

なお、広島大会を開催する時期は国立大学法人化の直前となります。会員の多くの方々にとって大変出席しづらい状況になることも考えられます。が、広島大学のある東広島市は別名「酒都」。全国にその名を馳せた酒どころでございます。この際、美酒で憂さを晴らして頂けたらとも考えております。

ところで、本大会では、従前、美術科教育が学校に対してどのような意味を持ってきたのか、あるいはこれからの教員養成システムのなかでどのような意味を持ち得るのか、さらにこの文脈の中で内容系諸分野はどのような機能を果たせるのか等々、あらためて我々がいま在ることの意味を問い直すことができると考えております。その他、俎上にのせるべき課題のご提案をいただけることもうれしく存じます。

遠路ご来広いただいたの2日間を充実したものにすべく、あるいは粗相なくみなさまをおむかえするため、このところ

造形芸術教育学講座の教官の協力を得つつ、三根和浪・中村和世の両氏が鋭意準備に取り組んでおります。一同、みなさまのご参加を心からお待ちしております。

* * *

既存の研究部会の見直しと 新規研究部会の公募について

研究部会担当理事

新井 哲夫（群馬大学）

岩崎由紀夫（大阪教育大学）

現在、美術科教育学会には、「データベース構築部会」（代表：上山 浩）、「美術教育史研究部会」（代表：金子一夫）、「工作・工芸領域部会」（代表：西村俊夫）、「アートセラピー研究部会」（代表：花篤実）、「国際研究交流部会」（代表：岡崎昭夫）、「美術教育の課題と授業研究部会」（代表：新井哲夫）の六つの研究部会が設けられており、それぞれ独自の活動を行っています。

そもそも研究部会については、1994年8月の定例理事会において設置が承認され、発足したものです（「資料2」参照）。したがって、当初から活動を行っている部会は、既に8年余にわたって活動を行ってきたこととなります。しかしながら、活動期間が長くなるにつれ、活動の一サイクルを原則として3年間としていた当初の確認事項があいまいになるなど、改めて研究部会の在り方について再検討する必要が生じてきました。

このような現状をふまえて、担当理事の新井と岩崎が中心となり、研究部会の一層の充実と発展を図ることをねらいとして、今後の研究部の在り方について検討してきました。そして、既存の研究部会

を対象に行った調査をもとに、別紙のような見直し案（「資料1」参照）を策定しました。この見直し案は、3月の役員会に提案し承認を得え、総会において報告しましたので、既にご存知の方も少なくないと思います。

見直し案の骨子は、以下の2点です。

- (1) 既存の研究部会については、継続、改編・改組、廃止等の今後の方針を決定する。
- (2) 新たな研究部会設立の希望を募る。

いずれも、2003年8月開催予定の役員会において、提案していただく必要がありますので、資料1の「見直しのスケジュール」をご確認の上、以下の準備をお願いします。

- (1) 既存の研究部会の代表者は、今後の方針を取りまとめてください（書式は特に定めません）。
- (2) 新規に研究部会設立を希望される方は、資料2の確認事項に基づいて、組織、活動方針等を取りまとめてください（新規研究部会設立申請のための書式等については、下記担当理事までお問い合わせください）。
- (3) 上記(1)(2)の報告及び申請については、2003年8月15日（金）までに、関係書類を提出してください。

研究部会に関する問い合わせ、関係書類の提出は、下記担当理事宛にお願いします。

＜研究部会担当理事＞

- 新井 哲夫 〒371-8510 前橋市荒牧町4-2 群馬大学教育学部
TEL&FAX 027-220-7316 /
E-mail: arai@edu.gunma-u.ac.jp
- 岩崎由紀夫 〒543-0054 大阪市天王寺区南河堀町4-88 大阪教育大学天王寺キャンパス
TEL&FAX 06-6775-6611 /

E-mail: yiwasaki@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

【資料 1】「研究部会」の見直しについて
(2003年3月26日の役員会で承認)

研究部会担当 新井哲夫・岩崎由紀夫

1. 見直しの基本方針

- (1) 研究部会に関わる確認事項を再確認するとともに、現状に合わせて一部修正の上、学会員への周知を図る。【確認事項の周知】
- (2) 確認事項に基づき、これまでの活動を一旦総括し、学会通信等で学会員に報告する。【これまでの活動の総括と報告】
- (3) (2)に並行し、新たな研究部会設立の希望を募る。【研究部会の新設】
- (4) 既存の研究部会については、継続、改編・改組、廃止等の今後の方針を決定し、学会員に告知する。新設の研究部会については、目的・活動方針等を学会員等に告知する。【今後の活動方針の決定と告知】
- (5) 継続及び改編・改組を今後の方針とする部会は、会員登録継続の意思の再確認と新会員再募集を行い、新設の研究部会は新規会員登録を行う。【会員の再登録／新規会員登録】

2. 見直しのスケジュール

- (1) 見直しに関する基本方針の承認…2003年3月26日役員会及び総会
- (2) これまでの活動の総括と今後の方針案の作成／新たな研究部会設立に関する公募…2003年4月1日～
- (3) これまでの活動の報告と新たな活動方針の承認／新研究部会の承認…2003年8月役員会（学会員への告知は、学会通信50号で行う）
- (4) 会員再登録及び新規会員募集…2003年8月以降
- (5) 新たな研究部会組織による活動開始…2004年4月～

3. 「研究部会に関する確認事項」の一部改正について

- (1) 「6. 研究成果報告の義務」の(1)を以下のように改正する。

改正案 現行

(1) 3年毎の更新時あるいは3年を経ずに部会を廃止する場合は当該年度末の理事会及び総会に、研究活動の経過とその成果を報告する。書式は特に定めない。(1) 毎年、研究活動の経過とその成果を理事会に報告する。書式は特に定めない。

【資料 2】「研究部会について」

(1994年8月の理事会における確認事項。学会通信No. 14に掲載)

去る8月29日の定例理事会で「研究部会」について確認がなされました。以下に確認事項を個条書きにしておきます。

1. 美術科教育学会会則第4条に定められた事業を推進するために、学会理事会の管轄下に「研究部会」を設置する。
2. 「研究部会」の定義
本学会の会員を中心として構成される美術教育研究グループで、特定のテーマ又は地域を中心として年1回以上の定期的な会合をもち、活動内容を理事会に報告できる研究組織。
3. 「研究部会」の目的、及び期待される効果
 - (1) 研究の専門的分業による深化と共同研究による広がり。
 - (2) 会員の恒常的研究活動への学会からの支援と学会組織の拡充。
4. 「研究部会」の組織、及び構成員
 - (1) 5名以上の構成員からなる研究組織で、本学会会員が半数以上を占めるもの。
 - (2) 「研究部会」には、代表者(1名)と事務担当者(1名)を置く。
 - (3) 代表者は、原則として本学会役員、又は役員経験者とする。

(4) 同一の会員が、複数の「研究部会」の構成員となることができる。

(5) 「研究部会」としての承認は、理事会承認後、3年間は有効とする。以後は、再申請し、新たに理事会の承認を得る。

5. 学会からの運営費の補助

(1) 構成員の数に応じて、学会本部より通信費等として、毎年、次の金額を補助する。

- ・構成員が10名以下は10,000円
- ・11～15名は15,000円
- ・16～20名は20,000円
- ・20名を超える場合は個別に検討する。

(2) 運営補助費の会計報告は略式で可。ただし、毎年、理事会に文書で報告する。

(3) 特に必要度が高い研究と理事会が認めた場合は、特例として補助費の追加もある。

6. 研究成果報告の義務

(1) 毎年、研究活動の経過とその成果を理事会に報告する。書式は特に定めない。

(2) 学会大会や学会誌で「研究発表」として発表する場合は、大会発表規程、又は投稿規程等の所定の手続きに従う。

(3) 「研究部会」単位の発表に限り、会員以外の構成員も氏名等を出せる。

7. 「研究部会」の申請と認定

(1) 「研究部会」の設立申請は所定の書式にもとづいて、代表理事まで提出する。

(2) 代表理事より理事会に諮問し、理事会の承認を得て、総会に報告する。

8. その他

(1) この「確認事項」は1994年8月29日より適用される。

「研究部会」設立申請のための書式・用紙をつくりました。ご希望の方は事務局までお申しで下さい。規程のようなものを記しますと大仰になりますが、普段着

の研究会が部会だと思います。つきましては、若い会員層の行動的なエネルギーに期待しています。様々のご提案を心待ちにしています。

* * *

美術科教育学会「東地区」研究発表会 —本年度の開催予定—

「東地区」では、以下の2つの研究発表会が開催されます。詳細は、それぞれ、同封の案内チラシとあわせてごらんください。

第4回「東地区」研究発表会 in 函館 —地域から今後の美術教育を考える—

- 1, 日時 平成15年(2003)7月26日(土)
午後13:00～16:30
- 2, 会場 函館市芸術ホール・地階ギャラリー (北海道立美術館隣り、五稜郭公園前)
〒040-0001 北海道函館市五稜郭37-8
TEL 0138-55-3521 FAX 0138-55-3586
路線バス 芸術ホール前下車徒歩1分
市営電車 五稜郭公園前下車徒歩10分
タクシー JR函館駅より約10分
函館空港より約20分
- 3, 主催 美術科教育学会
後援 北海道教育委員会、函館市教育委員会、函館市美術教育研究会、渡島美術教育研究会、檜山造形教育研究会
- 4, 日程
○受付 12:00～13:00
○挨拶・趣意説明 13:00
宮脇理氏 (元筑波大)

- 佐藤昌彦 (北海道教育大函館校)
- ゲスト発表 13:15-13:45、13:50-14:20
紀谷義彦氏 (前上磯町立上磯小学校長)
青野昌勝氏 (前北海道立函館美術館館長)
- 研究発表 14:30～15:00
仲瀬律久氏 (聖徳大)
- アイヌ民族の伝統楽器ムックリの制作過程と演奏 15:05～15:35
鈴木政昭氏・鈴木紀美代氏 (平成13年度ムックリ大会優勝、平成14年度世界口琴会議ノルウェー大会日本代表)
- 講話 15:45～16:30
大橋皓也氏 (上越教育大名誉教授)
- 挨拶 16:30
柴田和豊氏 (東京学芸大)
- 5, 懇親会 17:30～20:00
五島軒本店 5000円 (国登録有形文化財指定建物) 〒040-0053 函館市末広町4-5 TEL 0138-23-1106
FAX 0138-22-8073
- 6, 備考 資料代 500円程度
- 7, 参加申込先 佐藤昌彦 北海道教育大学函館校美術教育講座
〒040-8567 北海道函館市八幡町1番2号
TEL・FAX 0138-44-4355 (研究室)
0138-31-6115 (自宅)
Eメール satomasa@cc.hokkyodai.ac.jp

参加自由です (学会会員以外の方々も参加できます)。参加の申込みは、7月22日 (月) までにFAXまたはEメール、郵便などでお知らせください。当日受付も行いますが、できるだけ事前にお申込みください。宿泊は各自でご準備ください。
(佐藤)

* * *

第5回「東地区」研究発表会 in 宇都宮

テーマ

「ヨハネス・イッテンー造形芸術への道」

宇都宮美術館では、スイスのベルン美術館並びに同美術館のヨハネス・イッテン財団によって企画・組織され、イッテンの芸術とその美術教育活動の足跡を、イッテンの油彩画をはじめとする諸作品、及び彼が指導した弟子たちの様々の作品・資料をもとに検証する展覧会、「ヨハネス・イッテンー造形芸術への道」を開催(8月24日～10月13日)します。

80年代よりの再評価に加え、今日におけるイッテンの教育観と実践の可能性を再考する機会として、本展覧会開催にあたり、美術科教育学会の協力を得て、く東地区く第5回研究発表会を開催することになりました。

- 1, 日時 2003年9月14日(日)
13:00-17:00(学会員対象の受付は、午前11時00分より行います。)
- 2, 会場 宇都宮美術館講義室
(公開研究会となります)
- 3, 費用 500円 資料代と後日、講演、シンポジウム等を記録した冊子をお送りする送料となります。また当日、展覧会チケットとカタログを渡します。
- 4, 内容
 - 挨拶
大橋皓也(上越教育大学名誉教授)
 - 発表1 鈴木幹雄(神戸大学)
「ドイツにおける芸術学校の芸術教育学とヨハネス・イッテン」
 - 発表2 金子宣正(高知大学)
「イッテン・シューレで学んだ自由学園からの留学生」

- 発表3 本村健太(岩手大学)
「イッテンによる造形教育の今日的意義について」
- 5, 問い合わせ 宇都宮美術館学芸課
岡本康明
〒320-0004 栃木県宇都宮市長岡町1077
TEL028-643-6845 FAX028-643-0895

* * *

第4回学会「東地区」研究発表会 in 函館 開催によせて

— 『雁行する地域主義と文化の現在』 —

宮脇 理(元筑波大学)

1. 協働する複数の歴史

民主主義社会は、複数の歴史を許容する。「複数の歴史」というコンセプトは、ジャン・リュック・ゴダール(1930～: Jean-Luc Godard)が彼の作品『映画史』(1998)の中で語った言葉なのだが、複数の歴史の雁行が許されることは、民主主義の原則が大衆民主主義へと進む中では、ますます期待される着地点である。

しかし、建て前の民主主義はほんとうに複数の歴史の存在を認めているのだろうか。ここで云う複数の歴史とは、自然科学における突然変異をも含む進化の様態を指すのではなく、社会・人文科学、とりわけ文化の“ありよう”を指すものである。

2. イデオクラシー終焉のあと

1991年8月のソビエト社会主義共和国連邦の崩壊によって、一応、世界はイデオクラシー(イデオロギー強権政治体制)の終焉を迎えたが、これは単純な選手交代

の線上にあるのではなく、例えば、一方において脱・国民国家を目指す国家群が生まれ、他面では新しい国民国家を創ろうとする気配を許容可能なことを意味している。このことは、たとえアメリカ合衆国が今後も一人勝ちの独走を続けたとしても、旧西側の諸国では「対等の論理」が国家間、国家の内部に滲み出し、拡がり、多様な価値観を浮上させていることは確かである。また、未だデモクラシーとは一線を画している国家も、この「対等の論理」は、インターネットの波及によって浸透を促すであろうから、多元的な価値の存在が、複数の歴史を携えて進行することは、ますます闡明にされることと思われる。

3. 地域文化は広く、深く、波動を続ける

1994年9月20日、すでに10年前になるが、当学会が行った公開シンポジウム、通称「出前シンポ」が今回と同じく北海道教育大学函館校において実施されたが、テーマは「地域差から問う今日の美術教育」であった。その先行イベントの詳細は(『美術科教育学会20年史』(1999.03.26): p. 101)に記録されているが、以上にもとづき、当学会員の長谷川総一郎、福山博光、山田一美共編『地域文化と美術教育』(1995.06.30:長門出版)として出版されている。その「あとがき」には当時の「ありよう」を次のように纏められているので、若干だが抜粋し、紹介としたい。すなわち(山田一美氏)は「・・・今日、マジョリティ対マイノリティという対立構造のみならず、グローバリゼーション時代の人間の資質(地球市民的資質)に注目が集まる中、民族文化(地域文化)やマイノリティ差別問題が国を超える問題であり、異なる文化をもつ諸国・諸集団・諸地域の共生社会であるという認識を共にもちることが必然・・・(略)」とあるように、複数の文化が「対等の論理」の上であって、“地域主義”を超える地域コミュニティの視点の芽生えを提示している。

4. 『地域から今後の美術教育を考える』

今回は標記をテーマとして掲げたが、「地域主義」「地域文化」の表層をふたたび掘り起こし、さらに先行状況を超えた、具体的な個々の事例に眼な差しを移し、迫ろうとするものである。換言すれば、パソコン通信ネットワークによる現在の運動と雁行させつつ、そこでとり残され、気付かなかったアナログ的なメッセージやデータの読み取りを付加し、地域文化の存在と継承の現在/イマ/を俎上にのせ、そこから改めて「課題」を問おうとするものである。すでに自明のように、以前にも増して「一極化・集中化」がなされているからである。なお今回の「東地区」研究発表会では、函館在住の学会会員：佐藤昌彦氏が中心となって地域密着型の企画を行っており、開催に当たっては多くの参加者をお待ちしたい。

* * *

美術科教育学会「西地区」－第2回研究発表会報告と本年度の開催予告－

福本 謹一 (兵庫教育大学)

第2回美術科教育学会「西地区」研究発表会は、2002年12月7日(土)、大阪教育大学天王寺キャンパスにおいて開催され、4件の自由研究発表とセラピー研究関連の講演を実施した。

美術科教育学会前代表理事の花篤實氏による「我が国美術教育における文化受容の問題(山本鼎の実相主義)」では、大阪デザインに始まる造形デザインの教育が地方、地域、個へのベクトルをもって表層的な造形理論から子どもの心情に裏打ちされたものへ転換された経緯や創造主

義的な教育が美術教育の主流を形成しつつあった時代にあつてマニュアル的な方法論が支持された背景が山本鼎の実相主義を軸に報告された。そこでは文化受容として分断的な認知過程の問題が潜んでいることが指摘された。

松本アリサ氏のフレネと山本鼎の自由画教育を比較検討するという「造形絵画教室における自由画教育の可能性」では、両者のそれぞれの理念的実践的差異が明快に語られた。その中では、学校美術の枠組みを超えた視点が露わにされ、それが間接的な現行の美術教育批判ともつながっていた。松本氏の主宰する造形教室の実践報告からは、再構築主義や構成主義教育の実践モデルとしての側面が浮かび上がった。

幼児とメディアとの関係を追求した報告が塩見知利氏の「幼児の創造性開発のために実験」であつた。塩見氏はセンサ・テーブルと名付けられたデジタル・インターフェイスを他大学の研究者と共同開発し、独自のデジタルコンテンツを幼児向けに開発した。それを幼児の創造性開発に向けた保育実践としての可能性を考察している。幼児にとっての理解の形式が感覚受容器としての身体を通したものであるとの認識に立った総合的な感覚教材の開発は、幼児に限らず美術教育全体の課題として意味を持っていると考えられる。

理解の様式という問題は、寺下雅子氏の「視覚障害者と共に行う鑑賞活動の実践」発表にもつながっていた。バリアフリーの観点から美術館の教育普及活動の裾野を拓けるといふ意味でも寺下氏の所属した宇都宮美術館の取り組みは評価されるべきである。視覚障害者のイメージ形成に関する認知研究は多いが、こうした具体的な対象作品を前にした実践的考察が今後積み重ねられることが期待される研究であつた。

第1回の「西地区」研究会からの継続テーマであるセラピー関連の研究者とし

て大阪芸術大学の野田燎氏をゲストに迎え「音楽運動療法学入門」を演題とした講演をもつた。身体的・精神的障害を有する患者（パーキンソン患者、意識障害者など）に対する療法として音楽運動療法という、音楽演奏に合わせてランポリン上で上下運動を行う方法を野田氏は考案しその実績を、ビデオ記録を中心として紹介された。参加者は一様にその内容と成果に感銘を受けたが、療法的かつ医療的価値をもつ氏の方法論にセラピーという世界の奥行きを感じた。

○「西地区」研究会発表会の課題と今後の予定

過去2回の「西地区」研究会発表会では、いずれも優れた研究発表が行われたが、第1回目のセラピーに特化した研究会と美術教育との一般的なテーマも含めた研究会では、参加者の層が明らかに異なつた。ターゲットやテーマの設定を工夫して集客力の拡充とともに美術教育の議論を深化させる必要性を痛感している。平成15年度は、以下の3回の西部地区研究会を企画（案）している。詳細については、順次紹介していくが、現在のところ決定している内容をお知らせする。

第1回 7月5日(土)名古屋(美術館教育)
第2回 10月18日(土)兵庫(国際化教育)
第3回 12月20日(土)奈良(造形遊び総括)

* * *

第3回「西地区」研究発表会 in 愛知

テーマ

「美術鑑賞教育の広がり」と深まり」

(愛知県美術館との共催)

(学校での実践研究を中心とした発表)

1, 日時 2003年7月5日(土)

午後1時～ 4時半

2, 会場 愛知県芸術文化センター12 F,
アートスペースA

(地下鉄東山線・名城線「栄」下車徒歩3分)

3, 発表者

愛知県美術館教育普及担当者

小学校 2件(交渉中)

中学校 2件(交渉中)

参加はどなたでもできます。ただし、当日配布する資料代として500円をいただきます。

問い合わせ：ふじえ みつる

〒448-8542 刈谷市井ヶ谷町広沢

愛知教育大学 美術教育講座

Tel. & Fax. 0566-26-2444

mfujie@auecc.aichi-edu.ac.jp

* * *

第5回「西地区」研究発表会 in 奈良

1, 日時 平成15年(2003)12月20日(土)
午後12:00~17:00(予定)

2, 会場 奈良教育大学附属教育実践総合センター多目的ホール

3, 内容

25年を経た「造形遊び」の功罪—く新たに切り拓いた道—とく巻き起こした混乱・誤謬—その歴史/アンチ・テーゼ/「出会い」の拡大/小学校高学年での混乱/中等高等学校への連続性・非連続性/大学教育の無策、等

4, 問い合わせ先 宇田秀士

奈良教育大学〒591-8023 奈良市高畑町

TEL・FAX 0742-27-9223(研究室)

Eメール udah@nara-edu.ac.jp

* * *

特集「教育課程を創る」(9)(10)

芸術教科存続の方策

—厳しい現実に向かい合うアメリカの事例から見えるもの—

赤木里香子(岡山大学)

新学習指導要領による教育課程が完全実施されて1年。文化芸術振興基本法の施行とは裏腹に学校における芸術教育の時間数削減は現実のものとなった。教科存続の危機が迫るなか、なぜ図工・美術科が必要なのか、より説得力あるアピールを行うべきなのはいままでもない。努力はなされていると思う。だが、私たちの対応などまだのどかなものだとわがざるを得ない状況が、アメリカにはあるようだ。アメリカの高等教育や文化政策に詳しい同僚に教えられ、芸術教育の振興を謳う団体のWWWサイトを見て回るうちに、考えさせられてしまった。

全米の140を超える団体の連合体であるArts Education Partnershipのサイトでは、全米芸術基金(NEA)と教育省の同意と助成を受けて昨年刊行したCritical Linksと題する150頁余りの書物をPDFで入手できる。最近カタカナ語として定着した観のあるクリティカルという形容詞は、ここでは「重大な、決定的な、非常時に不可欠な、緊要な」の意ととれるだろう。ダンス、音楽、演劇、美術といった芸術の教育は、子どもたちの知的発達

や社会性の発達とクリティカルなつながりを持つというのが同書の主張であり、その裏づけとなる最近の研究論文62本がレビューされている。

美術教育に直接関連するのは、VTC(ヴィジュアル・シンキング・カリキュラム)が科学的観察力を養うというMoMAの報告書ほか4本である。さらに興味深いのは、The Journal of Aesthetic Educationの2000年秋冬号が採録されていることだ。ハーバード・プロジェクト・ゼロのメンバーを中心に編集された同誌では、芸術の学習と学業成績アップとの因果関係には、まだ確たる証拠がないという慎重な姿勢が貫かれていた。ところが、Critical Linksが強調するのは「芸術教育を受けた子どもは言語能力、数理的処理能力、コミュニケーション能力が向上する」「芸術教育によって学校からドロップアウトする子どもが減る」「芸術教育を重視する学校はSATで高得点を獲得する」といった命題そのものである。真偽の程はさておいて、その訴求力に重きを置いているのは明らかだ。

州知事の連絡協議会NGA(the National Governors Association)のサイトに掲載されたレポートにはもっと驚かされる。芸術教育は21世紀の経済に貢献する新たな労働力(workforce)を創出する、国家の時間と金を節約しつつ若年層の多方面にわたるスキルを高め、就労を促し、犯罪の発生を抑制する——ここまで言い切らねばならないほど、アメリカの芸術教科は追い詰められているということらしい。

これらの書物やレポートは、芸術教育が学校に必要なだと主張する人々にとって必携の書となるべく編まれている。アクションをおこす人々として想定されるのは、芸術教育の研究者や実践者だけではない。政策立案者、これから選挙に出る候補者まで含まれている。学力向上や創造性開発をめざした教育改革をスローガンに議席を得ようとするなら、叫ぶべきは芸術教育の重要性だというわけである。

このわかりやすさ、逆に言うと単純な割り切り方には些か抵抗があるというのが正直なところだ。しかし、教育社会学を専攻する先の同僚に言わせると、公的な教育課程に芸術を正當に位置づけるには、芸術教育に直接関わらない人々を巻き込んでその気にさせるしかないのは至極当然である。時と場合に応じて使える手はすべて使う。そんな、なりふりかまわず突っ走るパワーあってこそ、芸術教育は危機的状況から脱却できるのかもしれない。もちろん、直截な実用主義に立つ芸術教育振興戦略に、すべての関係者が賛同しているとは限らない。それでも使える手は使われている。そこに至るまでに、どれだけの確執があったのか想像に難くない。

昨秋イェール大学アート・ギャラリーを訪ねた際、教育部門学芸員のメアリ・コルダックさんに、芸術教育が「役に立つ」というアピールについてどう思うか率直な意見を聞かせて欲しいと質問した。いたずらっぽい笑顔とともに帰ってきた答えは「大切なのはハート、そして愛でしょう」というものだった。妙にほっとして思わず頷いてしまった私だが、この返答も、建前を取り除いたら本音が出てくるという図式にはおさまらない、いくつもの立場や考え方がせめぎあうなかで求められた平衡点だったのではないか。一筋縄ではいかないさまざまな思惑のぶつかりあい。それに耐えられる力が私たちにあるのか、試されるときはそう遠くないだろう。

* * *

いま、学校教育が担うもの

大橋皓也（元上越教育大学）

人類が社会を形成し、その組織が大きくなるにつれて教育が担うものは次第に質量ともに増大していった。かつて、人間が小集団で生活をしていた頃、教育の場は家庭やその周辺の小さな共同生活体のなかにあった。それは、教育以前の教育といってもいいような、子どもが自然に学ぶといったものであった。しかし、組織が大きくなるにしたがい、文字による記録や伝達が必要になり、数量を確かに把握するための数学も発達し、知識そのものの蓄積も次第に膨大なものになり共同生活体レベルの学びだけでは対応できなくなってきたのである。それらのことは長い人類史から見ればたかだか農業が始まった4-5000年前からの出来事で、四大世界宗教が生まれたのがほぼ2000年前のことであることも単なる偶然ではない。こうして次第に人間社会が巨大化する中で、集団による教育、学校教育にその文明の継承をゆだねることとなっていったのである。

この人間の歩みを単純に進歩とみるか、あるいは人間のエゴイズムの暗闘の歴史とみるか、そこに教育論が分かれる基点もある。脳生理学者の言によれば、人類の脳はここ数万年少しも変わっていないという。とかく人間は過去の人間よりも頭がよくなっていると誤解しがちであるが、それは知識や技術の集積が過去よりもあるということだけであって、頭がよく

なったという話ではないらしい。そのことは2000年以上も前に生きた孔子やアリストテレスのことを考えてみれば分りやすい。人間は考える力において、あるいは衰退しているかもしれないのである。知識や技術の集積によってかえって強欲になり凶悪になっているかもしれないのである。それはこれまでの地球上におこった数々の戦争のことを考えてみれば思い当たることも多いはず。昨今よく耳にするグローバル化などという路線も、私には人間社会のゆがみ以外のなにものでもないと思われる。今回のイラク戦争も自由と民主主義を標榜しているだけにかつてないほど欺瞞と傲慢さに満ちている。不完全とはいえ国際連盟の反省から国際連合を発足させた人類の智恵は民主主義の権化と見られていた当人によって簡単に破棄されたのである。国益という利権がらみの戦争は人間が獲得した最高の理念までも一気に破壊してしまったのである。特に、第二次世界大戦の反省から自由と民主主義こそ次の世代に残すべき人類最大の遺産として学校教育にかかわってきた私どもにとって絶望はあまりにも大きい。

とすれば、我々は本当の自由と民主主義の教育を新たに組み立てていかなければならないのである。当初、ニューヨークの街頭に10万人も動員された戦争反対のアメリカ市民たちの声はどうして押し潰されてしまったのか、なぜ70%以上のアメリカ市民たちが容易に好戦派の潮流のみこまれてしまったのか。アメリカ人といえども国益の旗標には血が騒ぐということでもあろうか。国益とは耳触りのいい言葉であるが、それは往々にして私利私欲、国際的エゴイズムに変容する。その醜態ぶりはアメリカの京都議定書の無視に典型的に現れている。太平洋の小さな国や島は海水面の上昇により埋没寸前にあるというのに石油産業をバックにしたアメリカは大国然として世界の声に耳をかそうとはしない。また、常に国政を批判

的に論じてきたアメリカのマスコミが今度のイラク戦争ではみな最右翼の轍にはまり良識の府から脱落していった経過を見てもその陰の力は歴然としている。

そして、日本もその轍を踏まないという保証はどこにもないのである。日本の教育の課題もまさにこのことにかかわっている。なぜなら、このことに対峙しない限り日本の未来も世界の未来も期待できないからである。こう考えてくると教育基本法を変えようなどという考えの底流にあるものが何であるかも見えてくる。愛国心が強調される時必ず国益がからんでくる。愛国という仮面をかぶった利権である。今日本の教育もそれとどう対峙するか、それこそ改革の方向でなければならない。美術教育がそれにどう応えることができるか。第二次世界大戦後の反省と教育改革の理念をもう一度思い起こし、民主主義的人間の育成こそ教育の永遠の使命であることを再確認しようではないか。

.....

特集「教育課程を創る」は、本号で終了いたしますが、これまで、以下の10名の方に貴重な提言をいただきました。

- 1, 堀典子(横浜国立大)ドイツの鑑賞教育が新しい情況を迎えた日本の美術教育に示唆するもの/2, 竹井史(富山大)新教育課程における造形表現領域の役割/3, 橋本忠和(兵庫県一宮町立繁盛小)循環型造形活動で総合学習の根っ子になる/4, 塚田美紀(世田谷美術館)美術館と学校の連携をめぐる覚書き/5, 石井理之(大阪府池田市立北豊島中)選択履修における美術/6, 鋏田和見(神戸市教育委員会)伝え合う美術/7, 佐々木幸(北海道教育大釧路校)「図工版プロジェクトX」の体験から/8, 浜本昌広(武蔵野女子大)美術教育「現在・過去・未来」-教育史に学ぶ/9, 赤木里香子(岡山大学)芸術教科存続の方策-厳しい現実に立ち向かうアメリカの事例から見え

るもの-/10, 大橋皓也(元上越教育大)いま、学校教育が担うもの

小学校、中学校、教育委員会、美術館、大学といったそれぞれの立場をふまえた提言・考察であったと思います。今後は、これらの提言・考察を、美術教育界の全体像として、どう結ぶかということが課題として残ります。

この意味で、先ごろ出版された『新しい科学の教科書-現代人のための中学理科』(検定外中学校理科教科書をつくる会、代表左巻健男、文一総合出版)は、大きな示唆となると思われます。「理科教育の現状を憂う教師と識者100人以上が集結し、教科書検定や学習指導要領に縛られない自由な立場でつくった現代人のための画期的理科教科書」だそうですが、美術教育でもやってみたいなあ、と個人的には考えました。会員みなさん、どうお考えでしょうか?

さて、次の特集として、「元気なヒト、げんきな活動」とテーマで、精力的な美術教育実践や活動の紹介をしていきたいと思えます。まず、トップバッターとして、とびきり元気な森田耕太郎氏に登場いただきました。次号以降、情報や寄稿をお持ちしています(他薦、自薦を問いません)。送り先は、以下の通りです。

〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学
宇田秀士、電話・FAX0742-27-9223、
Eメール udah@nara-edu.ac.jp

* * *

特集「元気なヒト、げんきな活動」 1

歩み始めた芸術系NPOからの自己紹介

NPO法人

Arts Planet Plan from IGA

代表理事 森田耕太郎

(京都市立芸大非常勤講師)

特定非営利活動(NPO)法人 Arts Planet Plan from IGAを紹介する機会を与えて頂き感謝しております。本法人は三重県青山町に事務所があります。2002年5月1日に法務局に登録し、活動を開始して、1年余りの期間が経過しました。法人会員は、約60名で、学生、主婦、銭湯経営者、陶芸家、木工家、デザイナー、建築家、地方公務員、中・高・大の教員(外国語、体育、書道、工芸、美術)など、職種も多種多様です。活動目的は、定款に書かれている内容を箇条書きに要約しますと、以下のようになります。

(D)地域住民等に対して、美術、工芸など造形芸術の創作活動と鑑賞の機会などを提供する。(E)造形芸術、文化に関する理解と普及の促進を図る。(F)造形芸術を活かしたまちづくりへの提言を行う。(G)造形芸術、文化に関する担い手の育成を図る。(H)これらの事業を行うことにより、自然と人の営みが調和し、心豊かで潤いがある生活を実現する。(I)芸術文化を通して人々がふれあい交流する、活力あふれる社会づくりに寄与する。

また、同じく定款に書かれて事業としては、その目的を達成するため、次の特定

非営利活動に係る事業を行う、とされています。(D)美術、工芸など造形芸術に関する創作、展示及び販売。(E)美術、工芸など造形芸術に関する講演、講座及びワークショップ等の開催。(F)美術、工芸など造形芸術に関する書籍、教材、資料等の作成及び販売。(G)美術、工芸など造形芸術に関する環境プランニング。(H)美術、工芸など造形芸術に関する人材の育成。(I)美術、工芸など造形芸術に関する政策提言。となっています。

1年目(2002)に実施した活動内容

昨年度は、運営のための会合は、総会1回、理事会3回、事務所会議等を20回ほど開催しました。

法人会員向け「実技講習会」は紙漉き(牛乳パックから)と草木染め、フェルト造形、地域貨幣活用法(不要品交換会)、陶芸(特)練り込み技法によるマイカップ作り)陶芸(監)施釉)、陶芸(企)本焼き)を開催し、会員・会員外を含めてものづくりを楽しみました。法人会員向け宿泊見学会も、「米子彫刻シンポジウム見学会」(米子彫刻シンポジウム、丹波篠山チルドレンミュージアム、境港市内、大山寺)と「四国ツアー」(イサム・ノグチ庭園美術館、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館【速水史朗展】、丸亀城、丸亀市内)の2回実施しました。大人の遠足です。「アトリエニュース」と称する法人会員向け会報を季刊で準備号を含め5回発行し、遠方の方に定期的に情報を提供しています。

対外的な活動は、一般向け造形ワークショップとして、「造形ワークショップ(特)～おもしろ楽器づくり～」と「造形ワークショップ(監)～フェルト造形入門～」を行いました。また、法人の活動を一般の方に知って頂く機会として、会員作品展「～はるのかたち展～」を地元の公民館で開催し、その期間中に「ギャラリーコンサート」(バリトン独唱、アイリッシュハープ演奏)も実施し新聞紙上やテレビ等にも取り上げられ好評を得ました。

他の市民活動団体との交流会等へも機

会があれば積極的に参加しています。主なものは、「自然学校はじっこクラブ」「伊賀環境問題研究会」「えこころ倶楽部」「伊賀県民局NPO担当」などと交流会、「伊賀の国市民活動団体交流会」「子どもメッセ in みえ」などがあります。それらの際も、法人紹介、作品展示や造形ワークショップも併催しています。



おもしろ楽器作り

その他の事業では、作家紹介や協力事業を行いました。作家紹介は、企画展等の際に、金工、ステンドグラス、漆等の法人会員の中で制作活動をしている作家を画廊に紹介しました。協力事業は、「追悼の場」整備計画企画構想案の策定に際して相談を受け、本法人会員のデザイナーを紹介しました。また、芸術的な視点を生かした街づくりについての意見を求められ、フィールドワークを実施しました。

助成金等は、昨年度中に申請したものの内、主なものとして、「平成14年度三重県文化振興基金活用事業補助金」（事業実施済み）【造形ワークショップ(特)】、「平成15年度子どもゆめ基金助成金」（採択内定）【立体造形をつくろうー木・土・石・金属をつかってー】、第9回(平成15年度)みえ県民文化祭参加事業助成金(採択決定)【Artist in Residence at IGA 2003】があります。また、「生誕360年 芭蕉さんがゆく 秘蔵のくに 伊賀の蔵びらき」事業にも応募中です。その他、文部科学省募集の「NPO等と学校教育の連携の在り方についての実践研究」（平成15、16年度）に

青山町教育委員会からの要請を受け連携するNPOとして共同研究を応諾しました。（三重県教育委員会を通じて青山町教育委員会が申請、全国から20地域が選抜。採択決定）本年度から、地元の小中学校や教育委員会等と連携した研究と実践が始まります。

2003年度当面の事業予定

本年度前半の事業として【Artist in Residence at IGA 2003】があります。内容及び期間（開催場所）は以下のとおりです。(日)開会行事：2003年7月20日(日)13:00～14:00（青山町北部公園）、(月)作家滞在型公開制作：7月20日(日)～8月31日(日)【9:00～17:00】（青山町北部公園）、(火)シニア彫刻教室：7月26、27日、8月2、3、9、10、23、24、30、31日【10:00～16:00】（青山町北部公園）、(水)講演会・パネルディスカッション・フォーラム：8月3日(日)【13:00～17:00】（青山ホール）、(木)彫刻作品展覧会：9月1日(月)～9月14日(日)【10:00～18:00】（最終日は15:00まで）、（青山ホール）、(金)ギャラリーコンサート：9月7日(日)【14:00～15:30】（青山ホール）、(土)閉会行事：～9月14日(日)【16:00～17:00】（青山ホール）。

また、別途事業として、子ども造形教室及び立体造形の映像教材作成も行います。公開制作は、石、木、土、金属の作家が滞在して行います。制作アシスタントのボランティアも募集しています。講演会等は基調講演を佐々木雅幸氏に依頼しています。（現：大阪市立大学大学院創造都市研究科教授・経済学博士「創造都市への挑戦」等の著者）パネルディスカッションのパネラーには佐々木氏はじめ、太田恵美子氏（現：NPO法人GDVI（グローバルドリーム ビジョン インターアクション）理事長・元公立中学校教諭 山本美芽著『リンゴは赤じゃない』新潮社刊のモデル）ほか3名を予定しています。

是非、多数の学会会員の方にも、自然豊かな三重県青山町で開催されます本事業の期間中に、会場にお越し頂ければ幸い

です。以上、紙面をお借りして、本法人の
僅かな活動と本年度の行事の広報をさせ
て頂きました。有難うございました。

■ 問合わせ先

特定非営利活動（NPO） 法人 Arts
Planet Plan from IGA

518-0205 三重県名賀郡青山町伊勢路字
青山1381-77

電話・FAX：(186-) 0595-53-1077
(非通知では繋がりません)

Eメール：appfi@kawachi.zaq.ne.jp

担当者：森田耕太郎（代表理事）

* * *

日本学術振興会科学研究費補助金
(研究成果公開促進費)の助成に
よる出版の紹介

立原慶一『題材による美術教育』
中央公論美術出版社、2003年1月



立原慶一（宮城教育大学）

本書で展開した「題材による美術教育」
の研究は、今から13年程前に書いた論文
が原型となり、それが実践と理論の両面
でふくらんでいったものである。そのた
め、ここに収められた作品例など一部の
内容については、今日では時代掛かって
いるとの感も否めない。しかし、美術教育
実践をめぐる体系的理論の構築が本書の
意図である点を考慮するならば、それほ
ど気後れしなくてもよいではないか、む
しろ理論の体系的な吟味に十分な時間を
かけることができた。このように考える
ようにしている。

本研究では「題材による美術教育」を簡
潔に「題材論的方法」とも呼んだが、それ
は題材に動機づけられた形で、自己の心
理的精神的あり方や内的欲望を世界（社
会）との関わりで、客観的に捉え認識す
ることを端緒とする。そこから、今後どう
しようかという制作の方向性が各自の内
面に見えてきて、主体的表現が拓かれて
くるのである。

さらに制作実践では、美的なもの（日
常的利害や必要を超えた感性的快の謂い）
の働きによって成立する柔軟な視点から、
画面に実現された主題形成（「表したい
こと」の造形表現化に成功し、作品から感
じ取られるべきもの）や、それによって触
発されて生じる美的内容を見つめること
で、生（価値を求める営みとしての生き
ること）の意味を感受し、自分がこれから
どうありたいのかの思いや気持ちがはっ
きりしてくる。いわば自己刷新が図ら
れるのである。それは美術的特質が教育
的作用を発揮する事態であり、題材論
的方法の美術教育的な意味と可能性が
明らかにされる場面である。

客観的で普遍的なものへのアプローチ
するためには、人文・社会科学的研究
では普通、言葉の秩序に依存するほ
かはない。用語や概念を明確にしな
がら、論理性や論理関係を厳格に展
開することが条件となる。本書にお
いては、そのスタンスで題材論を展
開したつもりである。ここに言う

題材論とは、題材の構成や制作法的展開をめぐる諸要素が、主題形成を目指して相互に関連し合っている主題表現（表したいことを造形表現にもたらしこと）の内容と様相であり、その理論的仕組みは体系的に連関している。

さて、現代の成熟社会に暮らす青少年には現実感が希薄で、前向きに生きる意欲が足りないなどと指摘されているが、本研究はそうした切実な教育的課題に対して、美術教育の立場から応えることのできる実践的方法論（ある教育目的のために構造化された制作法や鑑賞法などからなる理論的枠組み）を探究した。

その方法論とは、本来的に題材論を基軸とした制作法および鑑賞法が、理論的に自覚されて作動するアクチュアルな性格のものである。また内容的には、教育目的の実現を目指して構造化された制作と享受をめぐる、方法の理論的枠組みに支えられている。そこではこの実践的方法論が、題材論として導き出されるところに特徴が認められ、その題材論の構造に主体性回復と形成過程を跡づけることができたと思う。

紙数も限られているので、学問的要請に応える上で自覚されるべき、研究の対象と方法について最後に述べておきたい。題材実践を重ねることで研究のための根本資料として作品、二次資料として制作過程をめぐる所見や自分の完成作品についての感想などを得たが、ここで問題となるのが本研究は、一体何を研究対象として選定するかである。

そうした観点から着目したのが、人間の自己形成上重要な作用契機として、「主題表現」と「主題形成」である。一方の「主題表現」ではそこで働かされる想像力の質と程度が、他方、画面に実現された「主題形成」では、精神と生活に及ぼす内容上の違いが極めて顕著となり、客観的な類型化や図式化が可能となる。それらを研究対象として体系的に考察した。

また研究方法としては、それらの造形

的感覚的な特徴を類型学的に考察する手法を採った。それは隣接分野としての造形芸術学が取り扱う研究方法論である。ついで各類型における人間形成的意味や、造形的な展開とその享受に内包する教育的契機の特質を哲学的教育学的に解釈する、という方法を採用した。それは解釈学的方法と呼ばれるものだが、そうした手続きを踏まえることで「題材による美術教育（題材論的方法）」をめぐる学術的内容を、把握できたと考える。

* * *

英文による美術教育論文を募集しています

徳 雅美

（カリフォルニア大学チーコ校）

この度、米国・カリフォルニア大学チーコ校を拠点として、美術教育のサイト「Cultural Diversity in Art and Education」(www.csuchico.edu/~mtoku/webae / インターネット芸術教育誌『web AE 芸術と教育』所属)が発足しました。美術教育研究における日本と米国の相互理解と交流の一助となり、両国の窓口になれば幸いです。本サイトでは日本の研究者・美術教育者の皆様からの発信を期待し、皆様からの英語による論文原稿を募集いたしております。未発表・既発表を問わず、広い範囲で日本の美術教育研究を米国に紹介したいと考えています。皆様からの積極的な投稿をお待ち申し上げます。詳細は同封のチラシをご覧ください。

* * *